

原著論文

日本初記録のニザダイ科テングハギ属の稀種マサカリテングハギ(新称)
とその分布特性First Records of a Rare Unicornfish, *Naso mcdadei* (Perciformes: Acanthuridae),
from Japan, with Notes on Biogeographical Implications for the Species瀬能 宏¹⁾・御宿昭彦²⁾・伊東正英³⁾・本村浩之⁴⁾Hiroshi SENOU¹⁾, Akihiko MISHIKU²⁾, Masahide ITO³⁾ & Hiroyuki MOTOMURA⁴⁾

Abstract. Two specimens of *Naso mcdadei* Johnson, 2002 (Perciformes: Acanthuridae) were collected from Sagami Bay on the eastern coast of Izu Peninsula and the western coast of Satsuma Peninsula, the East China Sea, respectively. The Japanese specimens agreed well with the original description of the species. The specimens represent the first records for the species from Japan, and Sagami Bay is the northernmost limit of the range. The occurrence of this species in Japan is probably due to transportation by the Kuroshio Current from Taiwan in the adult or subadult stages. The new standard Japanese name "Masakari-tenguhagi" was proposed for the species. The original description of the species is Johnson (2002; published on 15 October), although Randall (2002; published in June) published the name, *Naso mcdadei*, before Johnson (2002), because Randall's description does not meet Article 16.1 of ICZN and represents an unavailable name.

Key words: *Naso mcdadei*, first records, northernmost record, Satsuma Peninsula, Sagami Bay

テングハギ属 *Naso* Lacepède, 1801 は、尾柄に固定された 1 ~ 2 個の骨質板をもつスズキ目ニザダイ科 (Perciformes: Acanthuridae) の海産魚類で、インド・太平洋海域から 20 有効種が認めら

れている (Randall, 2001, 2002; Johnson, 2002; Ho *et al.*, 2011)。本属魚類はケリス期と呼ばれる浮遊期間の長い幼期を経ることと関連し、一部の種は東太平洋の島嶼にも分散しており (McCosker & Humann, 1996; Robertson & Allen, 1996; Allen & Robertson, 1997)、日本からは全種数の 65 % に相当する 13 種が知られている (島田, 2000; Shimada, 2002; Chiba & Matsuura, 2012)。

2009 年と 2011 年に伊豆半島東岸の相模湾と薩摩半島南西部の東シナ海において、日本産既知種に該当しないテングハギ属の大型標本が時期を同じくして得られた。これらの標本を検討したところ、日本からは初記録となる *Naso mcdadei* Johnson, 2002 に同定されたので、新標準和名を与えてここに報告する。また、本種の日本水域における分布特性について生物地理学的に考察した。

¹⁾ 神奈川県立生命の星・地球博物館
〒250-0031 神奈川県小田原市入生田 449
Kanagawa Prefectural Museum of Natural History
499 Iryuda, Odawara, Kanagawa 250-0031, Japan
senou@nh.kanagawa-museum.jp

²⁾ 静岡県水産技術研究所
〒425-0033 静岡県焼津市小川 3690
Shizuoka Prefectural Research Institute of Fishery
Kogawa 3690, Yaizu, Shizuoka 425-0033, Japan

³⁾ 〒897-1301 鹿児島県南さつま市笠沙町片浦 718
Kataura 718, Kasasa, Minamisatsuma, Kagoshima 897-1301, Japan

⁴⁾ 鹿児島大学総合研究博物館
〒890-0065 鹿児島県鹿児島市郡元 1-21-30
The Kagoshima University Museum
1-21-30 Korimoto, Kagoshima 890-0065, Japan

方 法

計数・計測項目と方法は、以下に述べるものを除いて Randall (1994) とそれに修正を加えた Johnson (2002) に従った。鰓耙数は右側第 1 鰓弓の前端を切除した状態で痕跡的なものも含めて計数したが、この状態での上肢と下肢の区別は困難であったため、合計の値を示した。脊椎骨数の計数には軟エックス線写真を用いた。頭長は上唇前端と鰓孔上端間の直線距離、吻長は上唇前端と眼窩開口部の前縁間の最短直線距離をそれぞれ計測した。尾鰭長は尾鰭基底中央とすばめた尾鰭の後端間の直線距離を計測した。計測はノギスを用いて 20 分の 1 mm の精度で行い、四捨五入して 10 分の 1 mm 単位で計測値を得た。計測値は体長 (SL) の百分率で記載、比較した。色彩の記載における表現は財団法人日本色彩研究所監修 (1993) の系統色名に準拠した。標本はカラー写真を撮影後、10%ホルマリンで固定し、70%エタノール水溶液中に保存し、神奈川県立生命の星・地球博物館の魚類資料 (KPM-NI) と鹿児島大学総合研究博物館 (KAUM) に登録、保管した。また、鮮時のカラー写真は神奈川県立生命の星・地球博物館の魚類写真資料データベース (KPM-NR) と鹿児島大学総合研究博物館の画像データベースに登録した。

マサカリテングハギ (新称)

Naso mcdadei Johnson, 2002

(Fig. 1, Table 1)

Naso tuberosus (not of Lacepède): Gloerfelt-Tarp & Kailola, 1984: 252, fig. (western coast of Sumatra); Kuitert, 1998: 227, lower fig. (Maldives); Chen, 2003: 202, fig. (Penghu, Taiwan).

Naso cf. tuberosus: Kuitert, 2001: 119, 3 figs. (Maldives & Great Barrier Reef).

Naso mcdadei Randall, 2002 (published in June; unavailable name, based on Art. 16 of ICZN): 87, fig.; Johnson, 2002 (original description; published on 15 October): 295, figs. 1, 2 a, 3 a-b & 4 (Scottburgh, Natal; Mauritius; Chagos Archipelago, only stated as photographic record; southern Taiwan, only stated as photographic record; north of Dampier Archipelago, north-western coast of Australia; off south-west of Timor I.; north-east of Cape Grenville, Cape York Peninsula, Coral Sea; Lady Elliot I., Great Barrier Reef; type locality, off Stradbroke I., near Brisbane); Allen & Adrim, 2003: 63 (listed, Papua to Sumatra); Allen et al., 2006: 1741 (listed, type information, etc.); Ho et al., 2011: 209 (only name on phylogenetic trees); Allen & Erdmann, 2012: 1032, left lower fig. (Great Barrier Reef).

標 本

KAUM-I. 43820、1 個体、323.0 mm SL、鹿児

島県南さつま市笠沙町、野間岬南側、白瀬定置網 (北緯 31 度 24 分 49 秒; 東経 130 度 7 分 0 秒)、水深 27 m、2011 年 11 月 5 日、伊東正英採集; KPM-NI 25077、1 個体、465.0 mm SL、静岡県賀茂郡東伊豆町北川 (相模湾、伊豆半島東岸)、北川定置網、2009 年 11 月 26 日、畑 基則採集。

画 像

KAUM-I. 43820 の鮮時のカラー写真、本村浩之撮影; KPM-NR 48481、KPM-NI 25077 の鮮時のカラー写真、瀬能 宏撮影。

記 載

計測値と計数値は Table 1 に示した。

体はよく側扁し、中庸に細長い。尾柄は概ね円筒形で、後方に向かってすばまり、後部背側と腹側に欠刻が発達する。吻背縁は突出し、突出部の前後の頭部輪郭はほぼ直線状のため、眼のちょうど前方を頂点として角張る。突出部の頂点は口角の直上にあり、直線状の輪郭が作る角度は 124 度 (KPM-NI 25077) と 138 度 (KAUM-I. 43820)。軀幹から尾部にかけての背縁は腹縁よりもやや急な曲線を描き、体高は第 2 もしくは第 3 軟条基部で最大。腹縁は喉部付近の輪郭がやや急な曲線を描く。前後の鼻孔は近接し、眼の前縁のすぐ前方にある。前鼻孔は後鼻孔よりもやや大きく、開口部は肉質の縁となり、後縁は三角形の皮弁を形成する。眼前部の溝は両鼻孔下では斜め前下方へ向かい、その幅は狭く深い。前鼻孔下から前方では向きをやや前方へ変え、前方に向かって幅広く、かつ浅くなる。口はわずかに突出し、両顎歯は 1 列で、個々の歯の歯根は円筒形。歯冠は先端が尖った細長い二等辺三角形の切歯状歯で、切縁は細かい鋸歯状。体は上唇下縁と下唇 (口角付近がわずかに鱗で覆われる) の大部分を除いて微細で粗雑な鱗に覆われる。各鰭の棘や軟条も同様な鱗で覆われるが、鰭膜と胸鰭基底の関節部は無鱗。尾柄側面に概ね円形の 2 個の固着した骨質板があり、翼状の隆起縁が発達する。隆起縁の前方は鉤状にならない。側線は眼の上縁もしくは瞳孔の上縁のレベルでの鰓孔上方から始まり、尾柄上の前方の骨質板の少し前方で終わる。背鰭は鰓孔の上方もしくは上方よりもやや後方から始まる。棘条部は軟条部よりもわずかに高く、縁辺は体背縁の輪郭にほぼ平行。臀鰭は背鰭第 3 棘・第 4 棘間下に始まり、後方は背鰭軟条部と相対する。鰭の縁辺は体腹縁の輪郭にほぼ平行だが、第 8・第 9 軟条付近が高く、後方ではわずかに低くなる。胸鰭は第 1・第 2 分枝軟条が最長で、それより下方の軟条は徐々に短くなり、鰭の後端はやや円い。腹鰭は胸鰭基底下に位置し、第 1 軟条が最長で、鰭の先端は概ね尖る。尾鰭はほぼ截形で、上・下縁の鰭条は伸長しない。

鮮時の色彩 (Fig. 1) : 体はほぼ一様に灰みのブラウンで、背側ではやや暗く、下顎を含む腹側ではやや明るい、明るいグレイ。眼球上部に暗いブラウンのひさし状の覆いがある。鰓膜は明るいグレイ。尾柄の骨質板は黄みのグレイもしくは明るいブラウンみのグレイ。背鰭は前方の棘は灰みのブラウンで、それより後方の鰭条は濃い黄あるいはオリーブ。鰭膜は棘条部前方ではブラウンみのオリーブ、それより後方ではにぶい黄もしくはやや明るいブラウンみのオリーブ。鰭の外縁はやや黒ずむ。臀鰭は棘と前部の軟条が黄みのグレイもしくは明るいブラウンみのグレイで、後方の鰭条は明るいグレイ。鰭膜はさえた緑みの黄もしくはオリーブみのグレイ。鰭の後方の外縁はやや黒ずみ、縁辺は白い。胸鰭は基底付近が明るいグレイもしくは明るいブラウンみのグレイで、鰭条は赤みのグレイもしくはオリーブみのグレイ。鰭の後縁に幅広い透明帯があり、その基底側に沿って帯状に黒ずむ。腹鰭は明るいブラウンみのグレイ

もしくは黄みのグレイで、部分的に黒ずむ。尾鰭は基底周辺が灰みのブラウン、鰭膜は明るい灰みのブラウンもしくは赤みのグレイ、鰭条は基底側の大部分が灰みのブラウンもしくはこい黄～こい緑みの黄。鰭の後縁は帯状に黒ずみ、その基底側に沿ってにぶい黄もしくはにぶい緑みの黄の帯状明色域がある。

70%アルコールに保存した標本の色彩 : 基本的な配色パターンは鮮時と大差ないが、体は赤みが退色して全体的に明るくなり、背側は黄みのブラウン～明るい灰みのブラウン、腹側はベージュ～薄い黄～明るいグレイ。尾柄の骨質板は上半が濃いブラウン～ゴールド、下半が浅い黄～にぶい黄。背鰭は黄みが退色し、鰭条はあさい黄みのブラウン～明るい灰みのブラウン～灰みのブラウン、鰭膜はあさいブラウン～明るいブラウンみのグレイになる。臀鰭は黄みが退色し、鰭条はベージュ～灰みの白、鰭膜は青みの白～明るいグレイになる。胸鰭は基底が白く、鰭条はにぶい黄～暗いグレイ、

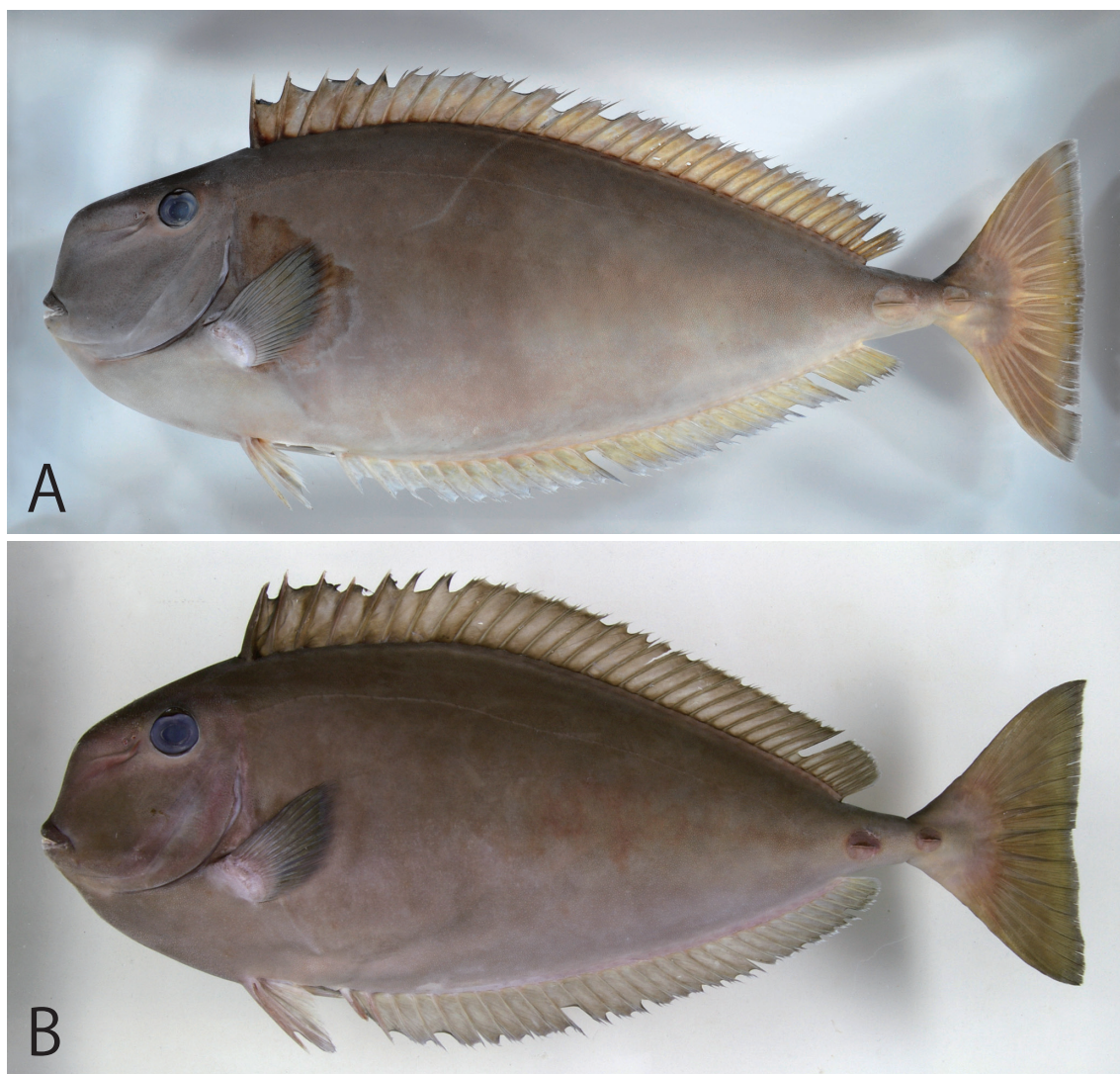


Fig. 1. Fresh specimens of *Naso mcdadei* from Japan. A: KPM-NI 25077, 465.0 mm SL, Hokkawa, Sagami Bay, eastern coast of Izu Peninsula, photo (KPM-NR 48481 A) by H. Senou; B: KAUM-I. 43820, 323.0 mm SL, south of Cape Noma, Satsuma Peninsula, East China Sea, photo by H. Motomura.

縁辺の透明帯は灰みの白となり、基底側の黒ずみはやや明瞭になる。腹鰭は棘や鰭条がベージュ～黄みの白、鰭膜は明るいグレイ。尾鰭は基底付近が明るい灰みのブラウン、鰭条はつよい赤みの黄～にぶい黄、鰭後縁の黒ずみはやや明瞭な黄みのブラウンあるいはグレイの帯となり、基底側の明色域はにぶい緑みの黄または明るいグレイになる。

分布と分布特性

伊豆半島東岸の相模湾（北川）および薩摩半島西岸の東シナ海（白瀬）（本研究）。海外ではナタールからダンピアー諸島までのインド洋（紅海からベンガル湾までの大陸沿岸を除く）、台湾およびオーストラリア東岸に分布する（本研究の異名表参照）。

本種の相模湾および薩摩半島における出現は日本

からの初記録であり、相模湾が本種の分布北限となる。

九州以北の太平洋岸においては、多くの熱帯性魚類が卵や仔稚魚期に黒潮によって輸送され、高水温期に着底してある程度成長するが、冬季の水温低下とともに死滅することが一般的事象として知られている。そのため、熱帯性魚類の多くは幼魚として一時的に出現するのみで、越冬して成魚まで成長することはほとんどないと考えられている（松浦・瀬能, 2012）。

Naso mcdadei は分布記録（本報告の異名表参照）から考えて明らかな熱帯・亜熱帯性の魚類であり、急なドロップオフや沖合のサンゴ礁・岩礁に生息する（Randall, 2002）。今回得られた標本のサイズは 323 mm SL と 465 mm SL と大型であり、いず

Table 1. Proportional measurements and counts of *Naso mcdadei* from Japan

	Present study		Johnson (2002)	
	KPM-NI 25077	KAUM-I. 43820	8 specimens including holotype	
SL (mm)	465.0	323.0	417-476	230-307
Measurements (% SL)				
Body depth at dorsal origin	31.2	35.4	30.6-33.8	34.5-39.0
Maximum body depth	35.2	38.1	33.6-38.4	37.9-41.3
Body width	12.2	12.3	12.2-13.5	12.4-13.2
Head length	23.6	24.7	20.8-22.8	22.3-24.4
Snout length	16.8	17.1	12.7-14.0	11.8-14.0
Orbit diameter	4.5	5.4	4.2-4.7	5.6-7.0
Preorbital depth	13.8	13.8	13.5-14.3	12.9-13.8
Bony interorbital width	7.1	7.4	8.4-9.2	7.8-9.0
Posterior nostril to orbit	1.4	1.8	1.8-2.1	1.5-2.2
Upper jaw length	5.0	5.8	3.5-4.0	3.9-4.3
Caudal peduncle depth	4.3	4.6	4.7-5.1	4.9-5.2
Caudal peduncle length	13.4	13.5	13.7-14.7	13.0-15.6
Dorsal fin base	66.2	66.9	64.3-66.7	65.3-67.8
Spinous dorsal base	12.4	13.3	11.7-13.1	12.6-14.1
Soft dorsal base	53.2	52.9	51.5-53.0	51.4-53.2
First dorsal spine	8.2	broken	7.3-9.5	9.0-13.3
Fifth dorsal spine	7.6	8.9	5.8-7.6	7.3-9.7
Longest dorsal ray	8.5	9.7	8.0-9.3	9.0-10.7
Last dorsal ray	5.6	5.8	-	-
Anal fin base	56.5	56.3	54.4-55.9	55.2-56.0
First anal spine	5.5	broken	4.9-6.4	4.8-6.6
Second anal spine	6.4	6.7	4.7-6.0	5.5-7.0
Longest anal ray	8.1	9.8	7.5-8.5	7.4-9.4
Caudal fin length	18.4	20.9	10.9-13.4	13.0-18.3
Caudal concavity	0.0	1.7	0.6-2.1	4.1-6.5
Pectoral fin length	14.4	15.4	13.1-14.7	15.1-16.5
Pelvic fin length	10.8	13.1	9.2-11.4	10.8-13.3
Pelvic spine	10.0	11.2	7.8-9.7	9.3-12.0
Prepelvic length	26.1	27.0	24.5-26.9	27.0-28.2
Predorsal length	27.5	28.5	26.9-28.4	27.9-30.0
Preanal length	34.6	36.2	32.9-34.5	35.5-37.8
First peduncular spine base	5.3	3.9	4.6-5.8	3.9-5.2
Second peduncular spine base	4.2	3.4	3.6-4.3	3.3-3.7
Counts				
Dorsal fin rays	V, 29	V, 29	V, 26-31	
Anal fin rays	II, 28	II, 28	II, 26-29	
Pectoral fin rays (included upper two rays)	18	17	16-17	
Pelvic fin rays	I, 3	I, 3	I, 3	
Branched caudal fin rays (upper + lower)	7 + 7 = 14	7 + 7 = 14	14	
Teeth on upper jaw	61	broken	50-70	
Teeth on lower jaw	57	broken	44-72	
Gill rakers on right first arch (anterior / posterior)	15 / 12	13 / 13	4-5 + 8-10 (4 + 10)	
Vertebrae (abdominal + caudal)	9 + 13 = 22	9 + 13 = 22	9 + 13 = 22	

れも11月に得られていることから、当該年の高水温期に着底して成長したものとは考えにくい。

薩摩半島西岸において、琉球列島に分布しないか、分布しても分布が南部に限られる熱帯性魚類の出現は、黒潮による台湾や八重山諸島からの無効分散の結果であり、中でもブダイ科のカンムリブダイ *Bolbometopon muricatum* (荻原他, 2010) やアイゴ科のゴマアイゴ *Siganus guttatus* (伊東他, 2011) のような大型魚の出現要因として、黒潮による成魚輸送の可能性が示唆されている(伊東他, 2011; 本村, 2012)。今回得られた薩摩半島産の個体については、本種が琉球列島からの記録がない一方で、台湾近海からの記録 (Johnson, 2002; Chen, 2003) があることを考慮すると、上述のカンムリブダイと同様、成長した個体が黒潮によって台湾から回遊してきた可能性が高いと思われる。

相模湾から得られた *N. mcdadei* は、そのサイズから明らかに成魚であり、当該年に着底して成長したものではないことは確実である。相模湾では同様な事例として同属のオニテングハギ *Naso brachycentron* の成魚 (全長 650 mm) の記録がある (山田・工藤, 1997)。この個体は1996年9月8日に湾奥部の藤沢定置で漁獲されたもので、漁獲当日に相模湾には黒潮系暖水の流入があったと考えられており、他に熱帯性のカライワシ科のカライワシ *Elops hawaiiensis* やアジ科のギンガメアジ *Caranx sexfasciatus* の成魚も漁獲されている。採集日とサイズから越冬個体でないことは明らかで、これらの魚類は成魚が相模湾外から回遊してきたものと考えられる。

相模湾では毎年多数のテングハギ属の幼魚が出現するが、越冬個体は確認されていない。このことを考慮すると、今回相模湾から得られた個体は成魚サイズでおそらくは台湾から薩摩半島経由で黒潮に乗って回遊してきたものと考えるのが妥当である。

備 考

Randall (2002) は世界のニザダイ科魚類の総説の中で、*Naso mcdadei* を Johnson (2002) が命名した種として掲載した。今回、両著作の公表年を調査した結果、Randall (2002) は2002年6月 (同著作中の書誌に基づく)、Johnson (2002) は同年10月15日 (論文掲載誌 Australian Journal of Zoology のホームページ <http://www.publish.csiro.au/nid/90.htm> に基づく) であった。前者は後者に先行するが、ICZN (1999) の条 16.1 を満たしていないため、そこでの名称は不適格である。従って、*N. mcdadei* の原記載は Johnson (2002) となる。

Johnson (2002) は、*N. mcdadei* を記載する際に 230 ~ 476 mm SL の8標本を調査した。本研究で調査した標本は 465.0 mm SL (KPM-NI 25077) と 323.0 mm SL (KAUM-I. 43820) なので、Johnson

(2002) の計測結果を成長による形態変化を考慮して 417 ~ 476 mm SL (ホロタイプを含む4個体) と 230 ~ 307 mm SL (4個体) の2群に分け、KPM-NI 25077 を前者と、KAUM-I. 43820 を後者と比較した。その結果、本研究の標本は Johnson (2002) の *N. mcdadei* の原記載に概ね一致したが、頭長、吻長、両眼間隔幅、上顎長、尾柄高、尾鰭長においては、2標本ともに明らかな差が認められた (Table 1)。また、KPM-NI 25077 は胸鰭鰭条数も原記載の範囲外 (16 ~ 17本に対して18本) にあった。これらの形質のうち、頭長、吻長および尾鰭長においては体軸に平行に計測することで、また両眼間隔幅においては眼の前縁での骨質部を計測することで原記載にほぼ一致したため、差異は Johnson (2002) が自身で述べた方法に従っていないか、誤った場所を計測したことに起因すると考えられる。

本研究で調査した標本は上述のように尾柄高や胸鰭鰭条数に若干の相違が認められたが、その他の点では原記載によく一致した。よって調査標本は *Naso mcdadei* に同定される。

本種を含むテングハギ属は、尾柄に固着した1 ~ 2個の骨質板をもち、臀鰭棘数が2本であることによりニザダイ科の他属から容易に区別される (Randall, 2002)。

本種は以下に述べる特徴を合わせ持つことにより、同属他種から識別できる (Randall, 2002; Johnson, 2002; 本研究) : 1) 尾柄の骨質板は2個; 2) 顎歯は切歯状歯で先端は鋭く尖り、切縁が鋸歯状; 3) 上顎歯数と下顎歯数はそれぞれ 50 ~ 70本と 44 ~ 72本の範囲にある; 4) 吻背縁は突出し、突出部は眼の前方にある; 5) 吻の突出部は前後の輪郭が直線状のため、明瞭に角張る; 6) 体側背縁に明瞭な盛り上がりや欠け; 7) 背鰭軟条数が 26 ~ 31本の範囲にある; 8) 臀鰭軟条数が 26 ~ 30本の範囲にある; 9) 尾鰭に伸長鰭条を欠く; 10) 体や鰭に目立つ斑紋がない。

本種には標準名が与えられていないため、頭部の角張った形状と細長い体形がまさかりの刃を連想させることから、KPM-NI 25077 に基づき新標準名「マサカリテングハギ」を提唱する。

謝 辞

相模湾産の標本を提供いただいた畑 基則氏 (北川漁業株式会社)、ならびに本稿の原稿を読んで有益な助言を与えられた鹿児島大学大学院連合農学研究科の松沼瑞樹氏に対して謹んで感謝の意を表す。本研究の一部はJSPS 科研費 19208019, 24370041, 24501278 の助成を受けた。

引用文献

Allen, G. R. & M. Adrim, 2003. Coral reef fishes of

- Indonesia. *Zoological Studies*, **42**(1): 1-72.
- Allen, G. R., N. J. Cross, C. J. Allen & D. F. Hoese, 2006. Acanthuridae. In Beesley, P. L. & A. Wells (eds.), *Zoological catalogue of Australia*, Volume 35, Fishes, Part 3, pp.1732-1744. CSIRO Publishing, Collingwood.
- Allen, G. R. & M. V. Erdmann, 2012. Reef fishes of the East Indies. Vol. 3. pp.857-1292. Tropical Reef Research, Perth.
- Allen, G. R. & D. R. Robertson, 1997. An annotated checklist of the fishes of Clipperton Atoll, tropical eastern Pacific. *Revista de Biología Tropical*, **45**(2): 813-843.
- Chen, C. -H., 2003. Fishes of Penghu. xxvi+379pp. Fisheries Research Institute, Council of Agriculture, Keelung.
- Chiba, S. N. & K. Matsuura, 2012. A record of bulb-nose unicornfish, *Naso tonganus* (Valenciennes, 1835), from the Tokara Group, southern Japan. *Bulletin of the National Museum of Nature and Science, Ser. A*, **38**(1): 49-52.
- Gloerfelt-Tarp, T. & P. J. Kailola, 1984. Trawled fishes of southern Indonesia and northwestern Australia. 406pp. The Australian Development Assistance Bureau, Australia, the Directorate General of Fisheries, Indonesia, and the German Agency for Technical Cooperation, Federal Republic of Germany.
- Ho, H. -C., K. -N. Shen & C. -W. Chang, 2011. A new species of the unicornfish genus *Naso* (Teleostei: Acanthuridae) from Taiwan, with comments on its phylogenetic relationship. *The Raffles Bulletin of Zoology*, **59**(2): 205-211.
- ICZN (International Commission on Zoological Nomenclature), 1999. International code of zoological nomenclature, 4th edition. Adopted by the General Assembly of the International Union of Biological Sciences. xxix+306pp. International Trust for Zoological Nomenclature, London.
- 伊東正英・松沼瑞樹・岩坪洸樹・本村浩之, 2011. 鹿児島県笠沙沿岸から得られたアイゴ科魚類ゴマアイゴ *Siganus guttatus* の北限記録. *Nature of Kagoshima*, **37**: 161-164.
- Johnson, J. W., 2002. *Naso mcdadei*, a new species of unicornfish (Perciformes: Acanthuridae), with a review of the *Naso tuberosus* species complex. *Australian Journal of Zoology*, **50**(3): 293-311.
- Kuiter, R. H., 1998. Photo guide to fishes of the Maldives. 257pp. Atoll Editions, Apollo Bay.
- Kuiter, R. H. & H. Debelius, 2001. Surgeonfishes, rabbitfishes and their relatives: a comprehensive guide to Acanthuroidei. 208pp. TMC Publishing, Chorleywood.
- 松浦啓一・瀬能 宏, 2012. 黒潮と魚たち. 松浦啓一編著, 黒潮の魚たち, pp.3-18. 東海大学出版会, 秦野.
- McCosker, J. E. & P. H. Humann, 1996. New records of Galápagos fishes. *Noticias de Galapagos*, (56): 18-22.
- 本村浩之, 2012. 黒潮が育む鹿児島県の魚類多様性. 松浦啓一編著, 黒潮の魚たち, pp.19-45. 東海大学出版会, 秦野.
- 荻原豪太・吉田朋弘・伊東正英・山下真弘・桜井 雄・本村浩之, 2010. 鹿児島県笠沙沖から得られたカンムリブダイ *Bolbometopon muricatum* (ベラ亜目: ブダイ科) の記録. *Nature of Kagoshima*, **36**: 43-47.
- Randall, J. E., 1994. Unicornfishes of the subgenus *Axinurus* (Perciformes: Acanthuridae: *Naso*), with description of a new species. *Copeia*, **1994**(1): 116-124.
- Randall, J. E., 2001. *Naso reticulatus*, a new unicornfish (Perciformes: Acanthuridae) from Taiwan and Indonesia, with a key to the species of *Naso*. *Zoological Studies*, **40**(2): 170-176.
- Randall, J. E., 2002. Surgeonfishes of Hawai'i and the world. 123pp. Mutual Publishing, Honolulu.
- Robertson, D. R. & G. R. Allen, 1996. Zoogeography of the shorefish fauna of Clipperton Atoll. *Coral Reefs*, **15**(2): 121-131.
- 島田和彦, 2000. ニザダイ科. 中坊徹次編, 日本産魚類検索: 全種の同定, 第二版, pp.1319-1330, 1629-1631. 東海大学出版会, 東京.
- Shimada, K., 2002. Acanthuridae. In Nakabo, T. (ed.), Fishes of Japan with pictorial keys to the species, English edition, pp.1319-1330, 1621-1622. Tokai University Press, Tokyo.
- 山田和彦・工藤孝浩, 1997. 神奈川県三崎魚市場に水揚げされた魚類・IV. 神奈川自然誌資料, (18): 73-78.
- 財団法人日本色彩研究所監修, 1993. 改訂版色名小事典. 134pp. 日本色研事業株式会社, 東京.

摘 要

瀬能 宏・御宿昭彦・伊東正英・本村浩之, 2013. 日本初記録のニザダイ科テングハギ属の稀種マサカリテングハギ(新称)とその分布特性. 神奈川県立博物館研究報告(自然科学), (42): 91-96. [Senou, H., A. Mishiku, M. Ito & H. Motomura, 2013. First records of a rare unicornfish, *Naso mcdadei* (Perciformes: Acanthuridae), from Japan, with notes on biogeographical implications for the species. *Bull. Kanagawa prefect. Mus. (Nat. Sci.)*, (42): 91-96.]

スズキ目ニザダイ科の稀種 *Naso mcdadei* Johnson, 2002 が、伊豆半島東岸の相模湾と薩摩半島西岸の東シナ海からそれぞれ 1 個体ずつ採集された。日本産の標本は原記載によく一致した。本種は日本からの初記録になると同時に、相模湾での出現は本種の北限記録になる。薩摩半島と相模湾における出現は、幼魚期における分散ではなく、成長した個体の黒潮による輸送の結果であることが示唆された。本種には標準和名が与えられていないため、新標準和名「マサカリテングハギ」を提唱する。